

浪江の

こころ通信

・第20号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第20号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218





濱本 啓一さん(川添)

取材者：NPO法人くびき野NPOサポートセンター 竹内
取材日：1月15日

浪江町民の絆をつなげ広げたい



▲浪江町コスモス会の皆さん。
前列左が濱本啓一さん。後列右が奥さんの安子さん。

濱本啓一さんは現在奥さんとともに新潟県柏崎市の県営住宅で避難生活を送っています。この地で暮らす浪江町民の交流を目的とした「浪江町コスモス会」を立ち上げ、日々会員同士の親睦を深めています。

■右も左も分からない震災発生時
私は震災発生時、妻と川添の自宅にいました。消防からの避難指示に従い、妻とともに双葉町の避難所へ。その後避難区域の拡大のため、避難場所を何度も変えることになりました。当時は何も情報がなく、朝起きたら避難所に誰もいなくなっていたことや、家に帰ろうとしたら自衛隊に道をふさがれたことなどがありました。何がおこって

いるのか、まるで分らないというのは不安になりますね。だんだんと状況が見えてきたので、新潟県柏崎市で生活する息子のもとに避難することが決まりました。自動車の少ないガソリンを気に掛けながら、福島、郡山と移動を続け息子と合流。3月16日には柏崎に到着しました。

■避難者のための「浪江町コスモス会」を設立
柏崎市には私たち夫婦を含めて300余名の浪江町民が避難生活を送っています。中には長期化する避難生活に疲れ、気持ちの内向きになり家に閉じこもってしまう人も。私はこのままではいけないと感じ、浪江町民が集い絆を再確認する場が必要であると考えました。その目的のため、震災から約1年の節目である昨年3月5日に「浪江町コスモス会」を立ち上げました。

ご存知の通りコスモスは浪江町の花。故郷への思いをつなげるためにこの花を会の名前に選びました。現在の会員は35名。柏崎市のNPO団体が運営する被災者サポートセンターを活動の場としてお借りして、主に月

■浪江町の思い出、そしてこれから
請戸川に上がる花火と桜、新町通りでの十日市、四季折々の風景など、浪江町の思い出はさまざまですが、何よりも思い出されるのは友人と過ごした日々。行事や四季を楽しむのは、いつも友人や家族とだからです。思



紺野 義則さん(南津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：1月9日

今でも心は晴れません

千葉での4カ月にわたる避難生活の後に、福島市の借上げ住宅に移られ、ご夫婦とお子さん2人で暮らしていらっしゃいます。

妹さんをはじめ、親戚の方々も近所にいらっしゃるそうで、見知らぬ地域での暮らしにとっては心強いのではと思いました。



▲つらい話題もありましたが、終始和やかにお話しくださいました。(美記子さん、義則さん)

■千葉では毎日「親族会議」
地震当日は自宅の仏壇が引っくり返るほどの強い揺れでしたが、電気も水も止まりませんでした。夜になって、入院中の父の面倒を見ていた姉の様子が気になり駆けつけてみると、家中は滅茶苦茶。帰宅したばかりの姉を連れ、自宅に戻りました。請戸や町なかの人たちが次々と避難して来られ、新しい集会所に70、80人になったでしょうか。区長である私は、役場や部落を回って差し入れの米や野菜、卵

などを運びました。請戸小学校の先生方が調理を一手に引き受けてくださり、煮炊きをしました。子どもたちを高台に避難させた後に逃げて来られ「本当に何にもないんですよ。」とっておられたことを、時折思い出します。

■頑張らなくてもいいから、負けないで欲しい
なれない地域で暮らすのは容易なことではありません。津島地区には8つの部落があります。が家族や隣近所はバラバラです。昨年6月に集まりを催しましたが、町長さんのお話と皆さんによるおしゃべりだけの会になりました。地区の約8、9割、約80人近くは集まってくださいましたよ。

自力で移動できない部落の方々をマイクロバスに乗せた後、私たち家族は二本松へ向かいました。千葉の住宅供給公社に3部屋貸していただき、電化製品など家財道具一式を手配してくれた弟と搬入作業をしました。ここで4カ月ほど暮らしましたが、ボランティア活動をしている弟から、毎日の暮らしがみんなで集まって報告し記録すると、引きこもりや孤立防止の手助けになるとアドバイスを受けました。しかし、福島県や浪江町など行政の情報が少ない中で、福島に戻ることにしました。

■父を見送れなかったことが口惜しい
当時入院中の父は病院ごと避難をしているだろうと任せていたのですが、まるで分らないという不安になりますね。だんだんと状況が見えてきたので、新潟県柏崎市で生活する息子のもとに避難することが決まりました。自動車の少ないガソリンを気に掛けながら、福島、郡山と移動を続け息子と合流。3月16日には柏崎に到着しました。



青田 康子さん(幾世橋)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：1月9日

不安も感謝の気持ちも、喜びも ごちゃまぜの日々でした

いくつかの避難所を経て、松戸の娘さんの近くで暮らす青田さん。日々の暮らしの中の思いをノートに綴っています。



私は、浪江町役場の近くで夫と二人で暮らしていました。震災2週間前に夫が他界しましたので、前日に二七日を終えたばかりでした。震災の日には、下水道の名義変更手続きで役場に行っていました。あわてて自宅に帰ったとき、私を心配して駆けつけてくれた夫の弟夫婦に、「津波が来るので早く車に乗るように」と言われて、取る物もとらず「いこいの村」へ避難しました。今、思えば、それが一時立ち入りまで帰ることができない、夫の遺骨を残したままの我が家となりました。

翌日、役場からの避難指示を

受け、親戚一同が車3台で「やすらぎ荘」へ。そこから移動の日々でした。「津島」「川俣南小学校」「パルセ飯坂」と。「尋常ではない車の渋滞」「飲まなければならぬ薬がないことへの不安」「なぜ避難するのかわからないままの避難」「寒さで眠れないつらさ」「雪の中の仮設トイレの寒さ」は8歳の身体には堪えませんでした。そうした様子が新潟の親戚に伝わり、わざわざ避難所まで迎えに来てくれました。新潟で一息つき、お風呂屋さんに行ったら、「被ばく検査を受けてから来て欲しい」と言われました。規則ですから仕方ないことですが、風呂上がりにずっと着ている下着に手を通したとき、情けない思いで一杯になりました。親戚の配慮で、部屋を借り、家具の用意を進めていたとき、柏の私の姪から「私の家に来てください」との連絡があり、3月18日に、松戸に住んでいる娘夫婦が、その当時には運行を再開していた上越新幹線で、迎えに来てくれました。娘夫婦は共働

きのため昼間ずっと一人ではとの配慮で、姪の家に一カ月間世話になりました。その間、震災の疲れでしょうか。体調がすぐれず、医者通いをしました。一月後、松戸に住む娘夫婦の家の近くに、娘の夫がアパートを借りてくれました。年寄りの一人暮らしですが、娘が買い物や身の回りの世話をしてくれるので、体調もよくなり、不自由なく暮らしています。浪江は、山、川、海があり、自然が豊かるところです。人情味が厚く、近所、親戚とも穏やかに暮らしていました。震災からまもなく2年。不安も感謝の気持ちも喜びもごちゃまぜの日々でした。日が経つにつれて望郷の念が強くなっていますが、今の暮らしを大事に前を向いて進んでいけたらと思います。



亀田和弘さん・玲子さん(樋渡)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 大内
取材日：1月13日

我が家のいいところは、決断と行動力です

和弘さん夫婦、義父の藤村宣明さん、娘の春美さん、愛犬「ゆず」は、千葉県佐倉市で、新たな人とのつながりを大切に暮らしています。



▲左から吉田真由美さん(春美さんの友人)、娘の春美さん、義父の藤村宣明さん、玲子さん、孫の和太郎くん、和弘さん、愛犬のゆずちゃん

【玲子さん】
大熊で料理教室を終え帰ろうとしたそのとき、大地震！
普段なら車で20分ほどの所が、道路の亀裂を避けながら2時間かかってようやく自宅にたどり着きました。その日は、父と愛犬のゆずと一緒に、経営していた川添上ノ原の店「なみえスパー」の事務所で一晩過ごしました。主人は地震当日、川崎に出張中でしたが、錯乱の中、公衆電話で安否を確認できました。翌12日早朝、避難命令を聞き、

主人の父と姉家族が集まり、着のみ着のまま総勢10名と犬1匹、猫1匹で避難しました。おおよそ10人が避難している津島を通過し、ガソリンがなくなるまで走行しました。千葉にいる息子がインターネットで「原発事故」や避難所情報を調べてくれ、メールで連絡を取り合いました。息子に西白河郡矢吹町体育館を教えられ、たどり着いたのは夜10時でした。地元の方の炊き出しをいただき4日間お世話になった後、千葉県君津市の叔父の知人の別荘に移動しました。別荘で主人、息子、娘に会えたときには、とても感動しました。10人の別荘での共同生活。皆それぞれ不安を抱きながらも料理は手作りし、協力して10日間過ごしたときは今でも忘れられません。その後、主人の父と姉家族は新潟に行き、私たちは知人の紹介で、現在の佐倉市の住宅を借りることにしました。東京の渋谷に住んでいた娘も、そこを引き払い一緒に暮らしています。私は、地域の公民館の「ソーイングクラブ」やパン教室を通じて多くの方たちと出会うことができました。料理教室も再開し、味噌作りや梅漬けなどを教えて

います。また、毎月数回、郡山、南相馬、会津、いわきを訪れ、料理イベントを通じて相双地区の方たちとお会いしています。【和弘さん】
平成22年12月にスーパーを閉店し、間もなく母を亡くし、その後の震災と大変なことが重なりました。佐倉市に移り住み、一昨年9月から、千葉県の緊急雇用制度で採用され、造園の仕事を始めました。以前の仕事とは大違いですが、外の仕事は新鮮です。仕事、福島との仲間とのゴルフ、親戚に会いに月数回福島を訪れるといった忙しい毎日ですが、身体に気をつけながら頑張っています。【玲子さん】
東電や国の対処の遅さには怒りを覚えます。しかし、結果の見えない話ばかりにしても仕方ありません。健康で心豊かな生活を自分たちで作っていかねばと思います。震災で失ったものもたくさんありますが、多くの友人、知人に助けていただきました。息子や娘の海外の友人からも多くの支援物資が送られてきました。これからもどんどん行動し、人との出会いと絆を大切に築いていきたいと思います。



綱引きチーム マリエンジェルス・スーパーフレンズの皆さん

取材者：浪江町役場 長沼
取材日：1月6日

強いつながりで、まずは1勝！

—浪江町の皆さんへ—
私たちががんばっています。
何か自分の趣味をみつけて、
一歩でも外に出てみませんか。
綱引きに興味のある方、お
待ちしています。



▲マリエンジェルスとスーパーフレンズの皆さん。
「男女一緒に早く浪江の体育館で練習したい！」

浪江町で活動していた綱引きチーム「マリエンジェルス」と「スーパーフレンズ」。

震災後、メンバーはばらばらになりましたが、平成23年10月に練習を再開しました。今は南相馬市の体育館で練習を続けています。

メンバーの強いつながりを感じながら、まずは全国大会1勝を目指し、力を合わせてがんばっています。

■監督
竹村 弥生さん(北幾世橋)
マリエンジェルスが結成されてから何度も全国大会に出場していましたが、平成22年度の大大会ではじめて3位に入賞しました。震災の日、町長に報告をして、休まずに練習を始めるつもりでした。
震災後、メンバーはばらばらになりましたが、その年の10月に大会に向けて練習を再開。震災で日常がなくなり、綱引きがみんなの心のよりどころになりました。みんなに会いたくて集まっています。強いつながりがあるんです。現在のメンバーは全部で

15名。浪江町に住んでいた人を中心に相馬市や宮城、茨城の人たちもいます。
練習は決して妥協はせず、やるからには成績を残したい。みんなが集まって練習できるのは日曜日だけです。がんばった結果が成績になるから、まだまだ先は見えないけれどがんばっていきます。
■キャプテン
蒔田 和江さん(相馬市)
全国大会では勝ちたくてもなかなか勝てず、「まずは1勝」を目標にずっと続けてきて、ようやく震災の年に全国3位になりました。今までみんなで歯をくいしばってがんばってきた結果。「さあ、これから！」というときでした。
震災後は、田村市船引町のアスリートクラブから練習場所を提供してもらいました。みんなで一緒に練習することでメンバーのリフレッシュにもなれると思っています。
全国のチームからもたくさん応援してもらいました。この環境に負けず、またゼロからのスタート。全国大会1勝を目指します。
■北 博子さん(棚塩)
全国大会に10年連続で出場すると表彰されるので、それを目指しています。今は7年連続で練習にきています。練習に

後、これまでもずっと高島町と浪江町の交流が続いてくれることを願っています。
「ガンバレ浪江！」
■やきとり大吉高島店
伊藤 健彦 店長
まほろばの里・高島で、今年も「浪江大吉SSBチーム」の皆さんと一緒にソフトボール大会を行うことができました。
「ノリノリGOGO！」の松崎代表、「常に冷静な」小松山主将、そして個性的なメンバーがそろった素晴らしいチームですね。来年もパワーアップした皆さんを、今から心待ちにしております。



ソフトボールチーム 「浪江大吉SSB」 佐々木健一さん(幾世橋)

取材者：浪江町役場 長沼
取材日：12月24日

「ありがとう高島」みんなで集まれる場所がある

ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」が今年も山形県東置賜郡高島町で行われた高島町総合体育大会ソフトボール大会に出場しました。今年は昨年よりも多くのメンバーが集まり、仲間とプレーできることの幸せをかみしめながら大会に臨んだそうです。

メンバーである佐々木健一さんにお話を伺いました。
※「浪江大吉SSB」は、浪江町のチーム「SSB」と「パイ山社中」との合同チームです。



▲現在は仕事のため単身で福島市にいる佐々木さん。家族の皆さんと一緒に。
長女の花恋ちゃんは、請戸の田植踊りの踊り子さん。伝統を受け継いでいくために日々がんばっています。
後列左から 健一さん、美智子さん。前列左から 玲音くん、花恋ちゃん。

私は震災後、家族4人で津島中学校、那須塩原と避難し、4月はじめに東京都の現在の住宅に落ち着きました。長女の小学校入学を控え、落ち着く場所を探すのに必死でした。
浪江町でSSBを結成したのが10年ぐらい前。当時のメンバーは同級生がほとんどでしたが、年月を重ね、若い人たちがメンバーに加わるようになり、震災前には町の大会でも上位に入れるようなチームに成長していました。
昨年の大会には日程が合わずに参加できなかったのですが、声をかけてもらったときには「こいつら、やるな！」と思いましたが、今年の大大会には、参加すること

ができ、ひそかに自主練習を積んでいたメンバーには驚かされました。高島町の皆さんは私たちを歓迎してくれて、浪江町をたくさん応援してくれました。試合前に円陣を組み「高島、ありがとう！」とみんなで感謝の思いを伝えました。きつとみんなに伝わったんじゃないかな。若いメンバーが本当によくついてきてくれます。これからの高島町のおかげで、こうやってみんなで集まれる場所がある。みんなが元気になることを確認し合える。だから、来年以降もつながっていくんじゃないかな。これからの高島町はかわらないけれど、地元のためにできることを探して、頑張っていくしかないと思っています。
■高島町ソフトボール協会
高橋 英助 会長
浪江チームの皆さん、2年連続で大会に参加していただき、ありがとうございました。
昨年お話を聞いたとき、「高島町で浪江町民の方々が集まれて、避難生活乗り越えられる元気を取り戻してもらえれば」と思い、町外チームの参加を特別に認めました。
今回も大いに盛り上げてもら

